

「世界で一番の贈り物」(2年)

翻訳家 ^{さとうみかむ} 佐藤見果夢

イーペル（本作品に描かれる戦場の舞台と考えられる町）の市民は、復興した町の中心街に、「フランドース戦場博物館」を建てました。この博物館の目的は、何よりも第一次世界大戦の悲惨さを伝えることです。が、他にも大きな特徴があります。それは、この地で戦った兵士たちとその家族の記録を、国籍を越えて収集していること。（中略）

「世界で一番の贈り物」に描かれたクリスマス休戦のエピソードを見れば、着ている軍服が違うだけで敵味方として憎みあうのが、どれほど愚かなことかがよくわかります。自分たちの生活の場を戦闘地に使われた被害者であるイーペル市民が、国を越えた戦場博物館を作ったのも、同じ気持ちからでしょう。

（『学習指導書2上』『訳者の言葉』より抜粋）



「桜守三代」(1年)

ジャーナリスト ^{すずきよしかず} 鈴木嘉一

全国の名桜を訪ね歩く佐野さんは「『ようここまで大きゅうなったな。そうそうは来られんけど、来年の春も気張って咲いてや。』と話しかけると、桜の木も喜びますわ。ほんまでっせ。」と真顔で話す。植物全般や庭石とも対話をするこの人にとって、植物や森林は人間と同じく自然界に生きる「生き物」である。逆に言えば、人間も自然界の一部にすぎない。

自然との対話を重ねてきた生き方、長年の経験と体からにじみ出たような言葉は、いぶし銀の輝きを放っている。

（『学習指導書1下』『筆者の言葉』より抜粋）



「生物が記録する科学

——バイオロギングの可能性」(2年)

動物行動学者 ^{さとうかつふみ} 佐藤克文

東京大学の教員として優秀な学生達に日々接するうちに気づいたのだが、未解決の謎をスマートに解ける学生は時々いるが、おもしろい謎、すなわち良い課題を自力で見つけられる学生はなかなかいない。研究者として幸せな一生を過ごせるか否かは、良い課題を自ら発掘できるかどうかにかかっている。「なんで?」を連発して先生を困らせる中学生がいたら、「君みたいな人が研究者に向いているらしい」と伝えていただきたい。研究が進むほど、謎が増えていく研究者の日常は、永遠に飽きることのない知的興奮にうち満ちた、世界最高の旅なのだ。

（『学習指導書2上』『筆者の言葉』より抜粋）



「作られた『物語』を超えて」(3年)

人類学・霊長類学者 ^{やまぎわじゅいち} 山極寿一

数年前、私は26年ぶりで昔仲良く付き合ったタイタスというゴリラに会いに行ったことがある。双方とも年をとっていたので、最初は気がついてくれなかった。でも二度目の出会いで私のあいさつに答えたタイタスは、突然子どものような顔になって、昔よくやったしぐさを私に見せ始めた。ああ、思い出してくれたんだな、と思うと、私は目頭が熱くなった。タイタスは26年という不在の時をはさんで、私を仲間として迎えてくれたのである。

逆の立場に立ったとき、そんなことが人間に可能だろうか、と私は思う。森を伐採し、野生動物たちを追いつめ、人間だけが住める世界を作っている私たちはどこへ行くのだろう。明日の世界を担う若い世代の人々に、少しでも自然の声に耳を傾けてほしいと思う。

（『学習指導書3下』『筆者の言葉』より抜粋）



「古典を心の中に」(3年)

国文学者 ^{たけうちまさひこ} 竹内正彦

現代に至ってもなお『源氏物語』などの古典は、著名な作家たちによって訳され続けている。新しい作品を生み出している現在の作家たちもまた、古典に親しみ、古典に学んでいるということなのだろう。むしろ、個性が重んじられる現代こそ、さまざまな古典に親しむということがますます重要になっている。古典を心の中にもつことは、今ここに生きるわたしたちの世界を拓いていく力となるのにちがいない。

（『学習指導書3下』『筆者の言葉』より抜粋）

